
essais ころみ 2018年6月

2018年6月5日（火） 午前は晴れ

先週金曜日からカラッと晴れた日が続いた。梅雨入り前の貴重な晴天だと思い、土曜日には緑の中を散歩した。新緑も色がすこし濃くなり、風に吹かれて、さわさわ鳴った。明日は芒種。

- 本を読むこと ① - 「読書」

「読書ばなれ」は言われて久しい。それも今や異次元に入っている。最近発表された大学生の読書ばなれの結果がそれを物語る。読書の意義自体、ピンとこない人が増えていそう。

本は読んでも、ハウツー本と実用書ばかりという人もいる。また、意外に多いのが自己啓発本。一時的で対処療法的なものでしかないと思うが、救われたという人も多いよう。

本をよく読む大人たちのおかげで、10代半ばから読書に親しんだ、道先案内をしてもらった。入学祝いは誰からも本だった。「堀田善衛」にも出会った。追って自分で全集も買った。

全集といえば、古典の全集もある。なぜ買う気になったのか、今ではよく憶えていない。2つの全集のために大きな書棚も買った。今もそこに全集たちが堂々と鎮座まします。

『読書とは本業に係る以外の本を読むこと』。同感。本業を俯瞰して見られるような本を読むことで、本業を際立たせるヒントも浮かぶというもの。同質的なところからは新しいものは生まれにくい。

先日ふと思った。これまで読んだ本のどれ一つとして、内容を詳しく覚えているわけではないのに、どこかしら精神の糧になっていく。即効性はないけど、じわじわと醸成されてきたのだと。

読書はそういうものだ。読書についてあらためて考えてみよう。

2018年6月11日（月） 曇り

先週梅雨入りし、今日も曇り空。でもアジサイはしっかりと映える。目を和ませてくれる。自然は浮き世に惑わされることなく、昨日も今日も明日も淡々をいきる。その浮き世では、明日シンガポールで歴史的会談。さて結果はいかに。

- 本を読むこと ② - 何のために読むか、何を読むか

本好きではないが、読書を自問自答の糧にしてきた。いま『君たちはどう生きるか』のマンガ版がよく売れているらしいけど、ずっと昔、10代の頃から“わたしはどう生きるか”と考えていた。

そういう頃に出会った大人が読書する人たちだった。わたしの〈読書史〉はこの時が前期、独立してからが後期になる。前期は10代半ばから20代半ばの10年ほど。

ほんの10年だけ、長い人生の第一の扉が開く頃。子どもから大人の世界へ。世間を知らない分、物事を真正面からみて、ある意味、もっとも哲学的で、直観力に長けて頃ではないか、誰しも。

当時から誰でも知っている作家の本は読まなかった。日本より海外の作家を読んだ。アメリカよりフランスのものを選んだ。日本の作家でもフランス文学を専攻した人のものが合った。「堀田善衛」がそうだ。

友人に本好きがいた。「太宰治」、「三島由紀夫」にハマっていて、わたしもためしに一冊ずつぐらい読んだ。でも、どうもピンとこなかった。彼女は思い募って寒い冬に青森へ一人旅。これには感心した。

とうの昔に音信が途絶えたので、いま彼女が当時をどうとらえて、読書をどう考えてるか知る由もない。わたしはと言うと、一点に尽きる。読書は人間・社会を映す鏡。

まわりの大人たちに勧められて読んだ本、背伸びして読んだ本、自分から好んで読んだ本。数はそれほど多くないし、どの本もほとんど憶えていないけど、決定的なことはいくつかある。精神の糧になっている。

2018年6月18日（月） 大阪で震度6弱

しだいに揺れが大きく、複雑になり、すぐに23年前の大地震が頭をよぎった。思わず小さく悲鳴をあげた。けっこう長かった。すぐにきょうだいたちのスマホへかけたが、通じなかった。メールは届いて、余震に注意しようと書き合った。

一番震度の高かった地域の一つが、北区茶屋町。当所は北区芝田だから、その一画のようなもの。レトロなビルで頑丈そうな建物だから、大丈夫だろうと思って、1時半ほどかけ自転車で着いてみると、ぱっと見たかぎりには変化はなかった。よくみると、壁かけの時計は落ちて、背の高いものが2、3倒れていたが、大したはことなかった。

震源は大阪北部らしい。今回のような大きな震度での震源は統計を取り始めて以来、初というから、ちょっとコワイ。同じぐらいの余震はあり得るだろうし、電車や地下街に入るのはできるだけ避けたいところ。それにしても、今日は早めに家を出なくてよかった。

念のため、帰りは早めるとしよう。

2018年6月26日（火） 晴れて、梅雨？

大阪北部地震から一週間。大阪市内は日常をとりもどしているが、北の方は違う。被災状況がずいぶん違う。大きな余震の心配は低くなっただけだが、今のところまだ余震を想定して、モノは低い位置においている。なんとなく地に足つなかなに感じである。

- 本を読むこと ③ - 本が教えてくれるもの

大人たちの読書会に参加したおかげで、まがりなりにも、読書が身についた。そこでは主に小説を、いろいろな著者のものを読んだ。自分から進んで読むようになったのは「堀田善衛」だった。

10代から20代にかけて、本を読んでいてよかった。つい最近になってそう実感。一番よかったのはこれに尽きる、「人間とは」、「社会とは」といったことの決定的な答えをいくつか知ることができたということ。

その一つは、どんな状況でも人の営みはあるということ。どこかで空襲があったとして、別のどこかでは変わらない毎日を、遅く、図太く、生きている人間。

当たり前といえば当たり前なのだけど、歴史の象徴的な出来事の足もとに暮らす人間たちの無数のドラマ。時代は違って、それは変わらないという、子供ながらの発見。はじめて大人の見方ができた瞬間だったかもしれない。

23年前の阪神あわじ大震災。一週間ほどして住んで箕面から梅田へ出たとき、啞然とした。テレビが連日報じる各地の被害状況とはまるで別世界。大阪駅周辺はまったくいつもの日常の風景。

ほんの30分も行けば、大変な事態になっているのに…。大阪駅前の賑やかな様子に、これがあれだ…。むかしの発見が、リアルな場面として目の前にあらわれた感。

同時代も何層も何面も何体もある。そういう見方を知った、読書。